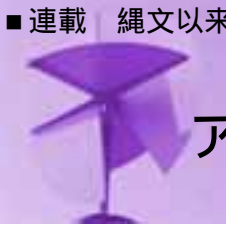


■連載 縄文以来の伊達心



アルパカ、肌刺しなくソフトで滑らか

大きめのラマ、野性のビキューナ、グアナコも同様です。

ペルーではアルパカ類の動物の所有権はインディオが持っています。集毛業者は大きなトラックにて4千mの部落まで買い付けに向かいます。

そこには、2千mの山麓に百余年前から集荷、加工基地として開かれてきたアレキパ（英語読みアレキパー）があり、インディオのおばさんが子供を背負って、アルパカの毛に埋まって、仕分け、手選別をしています。

毛のグレード別では、ベビー・アルパカは21～23ミクロンで産毛シェアー1.5%、スーリーは毛足が長くモヘアの様な光沢のある種類のアルパカで24～26ミクロン、産毛シェアー5%、アルパカファインは25～27ミクロンで産毛シェアー60%、アルパカとリヤマのCOARSEは34～36ミクロンで産毛シェアー30%。

アルパカ類の全産毛量は610万kgで羊毛全産毛量の0.15%にすぎません。アルパカ類の特質はソフト、滑らかで、肌を刺さしません。氷河期生き残りのラクダ科独特の軽さがあります。

天然の色の種類も動物繊維中、最も豊富でコート地、手編み、ニット製品、スーツ地、毛布、ショールなどに使われます。特にワシントン条約で保護されているビキューナは、10～12ミクロンと動物繊維中最高に細く、乱獲の為一時5千頭に減ったものが、10年間のアンデス諸国協調、努力のすえ、元の10万頭に回復しています。

極めてデリケートな動物で捕えて毛を刈ると死んでしまうので、死なせずに毛を刈る科学的な新しい方法を工夫しています。古来より皇帝の着る分のみが、4年に一度だけ採毛されてきたのです。

マテリアル・コンサルタント 川島茂信

2)染色：ソフトな手触りと風合いを保って、ラクダ属であるアルパカの毛を濃色に染めるには最高の技術を要します。

摩擦堅牢度を保つのに要注意です。黒に染めるには、黒に近い色の濃い天然の色から染めるとか、最適の浸透剤を選ぶのに工夫するか、なるべく薄色に染めるというわけです。アルパカは天然の色で染めないで、ブレンドされる羊毛を染めて色出しするなどの工夫が必要です。

アルパカは染めれば、繊維のバラつきが大きいので、一本一本の繊維が夫々違う濃度に染まり、極めて深みのあるメランゲの優雅な効果が出せます。

3) BLENDING：アルパカは最も滑り易い繊維ですので、糸の断面が真円になる程の強い縮絨力のある英国羊毛：SUPER PICC SHROPSHIRE、TEESWATER HOG、BLUEFACE LEICESTERHOG、CHEVIOT HOG等とBLENDINGして、アルパカが総て糸の表面に出て、英国羊毛が芯に入る紡績をすべきです。

又アルパカより毛足の長い64's & UPのメリノ羊毛とベビー・アルパカ、ファイン・アルパカとブレンドして30～40'sの糸を紡績すべきです。アルパカとMERINO QUALITYはビックリするほどシットリとした優雅な手触りが得られ、色調はダルの風合いになります。

1800年後半、初めてアルパカが英RADFORDに紹介されて最初に作られた作品は経糸・絹で緯糸アルパカ100%の単糸で光沢に富んだ物でした。経糸が綿糸で緯糸アルパカ単糸の紳士服向け裏地が当時大好評を博し、後世「アルパカ裏地」が最高級裏地の表徴としての代名詞になってしまい、アルパカが使われてなくても「アルパカ裏地」と呼ばれるようになりました。